

## 2022（令和04）年度 東北アジア研究センター共同研究報告書

提出 2023（令和5）年 5月 16日

代表者 越智 郁乃

（本報告書はセンター内外への公開を原則とします）

|  |  |  |           |            |
|--|--|--|-----------|------------|
| 研究題目   | 和文) 地域間交流と農業の持続可能性に関する文化人類学的研究-東北地方のホップ農家を事例に<br>英文) An Anthropological Research On The Development of Co-creative and Sustainable Agriculture among Regions in Tohoku, Japan.   |  |           |            |
| 研究期間   | 2022（令和4）年度～2023（令和5）年度（2年間）   |  |           |            |
| 研究領域   | （C）移民・物流・文化交流の動態   |  |           |            |
| 研究組織   | 氏名   | 所属・職名                                    | 専門分野      | 役割         |
|  | 越智 郁乃  | 文学研究科 准教授                                | 文化人類学・民俗学 | 代表・統括      |
|  | 高倉 浩樹  | 東北アジア研究センター教授                            | 文化人類学     | 受け入れ教員     |
|  | 包 双月   | 文学研究科 助教                                 | 文化人類学     | 分担者        |
|  | 川口 幸大  | 文学研究科 教授                                 | 文化人類学     | 分担者        |
|  | 霍 禹衡   | 文学研究科博士課程前期2年                            | 文化人類学     | 分担者        |
|  | 佐藤 颯人  | 文学部4年                                    | 文化人類学     | 分担者        |
| 研究経費   | 学内資金   | センター長裁量経費 [金額] 299,600 (円)               |           |            |
|  | 外部資金(科研・民間等)   | 「横手市におけるホップ農家を中心とした農業の持続可能性に関する文化人類学的研究」 | [小計]      | 1198,480 円 |
|  | 合計金額   | 1,498,080 円                              |           |            |
| 研究の目的と本年度の成果の概要<br>(600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。) | <p>本研究では日本の減反政策を機に転換作物として栽培が始まったホップを例に、栽培が盛んな地域間の交流や観光交流を基にした農業技術継承の検討を通じて、農業の持続可能性を人類学的に探究する。具体的には、50年以上ホップ栽培が行われているものの農家の高齢化と離農により栽培量の減少が続く岩手県遠野市及び秋田県横手市を事例に、栽培農家や農業組合、ビールによる観光交流を進める団体等への聞き取り調査を進めながら、1) 地域毎または連携による栽培技術への影響、2) 新規就農者の定着に係る諸条件として後継者育成以外に小規模醸造所や飲食店の経営、観光との接続、移住者ネットワークを観光人類学的観点から明らかにすることで、地域間の共創的かつ持続可能な農業の発展に繋げる。</p> <p>1年目は横手市を中心に栽培農家（既存農家）への聞き取りを通じてこの50年間での営農や土地利用の変化について調査した。また新規就農者の育成事業とそこで学び就農した新規農家に聞き取りを行い、既存農家との比較を進めるとともに、大手ビール会社と小規模醸造所によるホップの買い上げ、醸造、販売について調査した。そこから以下の点が明らかになった。1) 既存農家（多くは夫婦や家族営農）は大手ビール会社との契約の枠内で最適化され栽培方法を熟練させることで最大限の収穫量と収益をあげ、他地域にない高い栽培技術力を蓄積する一方で、植え替えて収穫量の落ちる新品種の導入には慎重である。</p> |  |           |            |

|                                   |   |   |          |
|-----------------------------------|---|---|----------|
|                                   | 2) 新規就農者の多くは単独か法人で営農するため人手がさげず、栽培の手間を省ける新品種で、多少の品質のムラも許容しながら効率よく多品種栽培することを目指す。また小規模醸造場と連携しながら、大手にないホップや味を求めるクラフトビール作りで、ムラ＝個性を出すことをよしとしている点でホップとビールをめぐる認識に乖離が認められる。以上、調査で得られた資料を基に、次年度は遠野での調査を実施する。  |   |          |
| 本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール | 財務省（税関）の報告によると現在日本のビール輸出は100億円以上の規模で、コロナ禍で一時落ち込んだが、今は増加傾向にある。2022年の主な輸出先は1位台湾（28.4%）、2位韓国（27.6%）、3位オーストラリア（11.6%）であることから東アジアへの輸出が半数以上を占め、中国への輸出も増大している。また日本政府及び日本貿易振興機構は日本からの農林水産物や食品の輸出額増大に向けた取り組みの中で、重点品目としてクラフトビールを指定している。以上のことから、東北アジア地域における食文化や消費と連動する日本の特定作物の営農について研究を進めることは、日本だけでなく輸入国・地域に関する経済学や農学など多岐にわたる研究にインパクトを与えると考える。             |   |          |
| 研究集会・企画                           | 研究会・国内会議・講演会など： 5 回   | 国際会議： 0 回   |          |
|                                   | 研究組織外参加者（都合）： 70 人  | 研究組織外参加者（都合）： 0 人   |          |
| 研究成果                              | 学会発表（ 1 ）本  | 論文数（ 1 ）本   | 図書（ 0 ）冊 |
| 専門分野での意義                          | [専門分野名]<br>文化人類学・民俗学  | [内容]かつて営農の基盤であった親族組織・同族について取り上げ、現地調査から組織秩序の有り様について考察することで、現代における同族結合の意義を明らかにした。 |          |
| 学際性の有無                            | [ <input checked="" type="checkbox"/> 有 / <input type="checkbox"/> 無 ]  | 参加した専門分野数： [ 2 ] 分野名称[農学・工学]  |          |
| 文理連携性の有無                          | [ <input checked="" type="checkbox"/> 有 / <input type="checkbox"/> 無 ]  | 特筆事項：   |          |
| 社会還元性の有無                          | [ <input checked="" type="checkbox"/> 有 / <input type="checkbox"/> 無 ]  | [内容]調査地において5回に渡り行政や栽培農家を招いた研究会・会議を開催するとともに、問題解決に向けた検討会における提言を通じて現地還元を行なった。      |          |
| 国際連携                              | 連携機関数： 0  | 連携機関名：  |          |
| 国内連携                              | 連携機関数： 2  | 連携機関名：横手市農林部、農業・食品産業技術総合研究機構  |          |
| 学内連携                              | 連携機関数： 3  | 連携機関名：産学連携機構産学共創推進部、工学研究科、農学研究科   |          |
| 教育上の効果                            | 参加学生・ポスドクの数： 4  | 参加学生・ポスドクの所属： 文学研究科   |          |
| 第三者による評価・受賞・報道など                  | なし  |   |          |
| 研究会計画全体の中での当該年度成果の位置づけと今後の課題      | 2年計画のうち1年目は、横手市のみ限定してホップ栽培の参与観察から農閑期の聞き取り調査を行うことで、農協や地元企業等の地域内での各種団体と連携をとりつつ、50年以上の長期的な営農の変遷、そして現代における6次産業化を考慮した営農の急激な変化に関する調査を十分に実施できた。また、他地域との交流に関するトピックを考慮した聞き取り調査を行うことで、遠野だけでなく、江刺や山形等、他地域でのホップ栽培に関する情報や秋田市の小規模醸造所に関する情報が得られた。他方で、遠野に見られるようなビアツーリズム等、外からの客を呼び込む観光政策に関して横手では行われていないことから、来年度以降の遠野市での調査時には、より観光に特化した団体や取り組みに関する調査が必要になると考えられる。 |   |          |
| 最終年度                              | 該当 [無]  |   |          |

**本共同研究に関わる業績（発表予定含む）**

〔学会発表〕越智郁乃 2023「二つのミンゾクガク（民俗学/民族学）的フィールドワークの交錯」（10月に開催される日本民俗学会 2023 年年会シンポジウムにおいて発表予定）

〔雑誌論文〕霍禹衡 2023「現代日本同族の秩序に関する人類学的考察－秋田市水沢集落を事例に」『東北人類学論壇』22号（印刷中）

〔その他〕現地報告会「横手市連携協議会における中間報告」（2022年12月27日）「横手市産業振興分科会農林部門『横手市農業持続的発展事業（持続可能なホップ生産推進事業）』『持続可能なホップ生産モデルの構築』農家ヒアリング中間報告」（2023年2月17日）「令和4年度 持続可能なホップ生産推進事業 活動報告会」（2023年3月17日）「2022年度よこてホッププロジェクト全体会議」（2023年3月29日）

\*ファイル名は KyodoRpt\_年度\_代表者ローマ字とする。二つある場合、代表者名の後に 1, 2 と記入する（例 KyodoRpt\_2013\_oka1）。